

「巻き込まれ親父の番外編 「親父と呼ばれた男」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

世の中戦争が無くなって平和なのに越したことがないが、戦争で飯を食っている人にとっては、辛い冬の時代の到来である。

先の大戦が終わり、皇国政府はC国政府との間に講和がなされたが、議会選挙であつさり野党に転落したC国の反政府組織は地方で軍閥化し、その拠点を作るべくしばしば国境を挟んだ皇国領土の島嶼に対する侵略が行われ、それに対する皇国側の奪還・防衛戦が続いている。その一方で、世界は国連主導による軍縮が肅々と進められ、皇王の命により、徴兵制度は廃止され、また同時に皇国政府軍3軍の兵士の数を減らすことになった。

H Gは帝都機甲師団特殊車両試験部隊の兵士で、当時民間の兵器開発企業へ出向組の一員であつたが、そういう手合いは真つ先にリストラの対象になった。親友のS Kは戦地で足を負傷し、杖無くして歩けなくなったので、とうの昔に傷痍軍人として除隊し、恩給暮らしをしていた。H GにはI IとS Kの代わりのY Tと言う部下が居て、二人ともソフトウエアに強いと言う事で原隊復帰の通知を受けた。しかし、隊長のH Gはその場で除隊勧告が言い渡された。

H Gが徴兵され18年余：普通なら徴兵任期满期の4年でとうの昔に除隊しているのが当たり前であつたが、ついた任務が民間兵器産業に長期出向状態のため、本人の希望に関係なく軍籍に留まり続ける特殊な仕組みなのと、任務が面白かったので任意申請除隊をしなかったため、この年齢まで兵役についていた。おかげで兵役恩給はかなりの高額を確保できているし、また軍縮による除隊に対しての給付金の上乗せが貰えた。

H Gは除隊と共に、それまで住んでいた帝都郊外の民間の兵器開発企業の社員寮を引き払う事になった。

帝都の実家で暫く両親と暮らす兄夫婦の家に居候をすることになったが、すぐに引越す事になった。それは、H Gの父親の妹である叔母が長期入院する事になり、長年管理していた曾祖母・祖母が住んで居た土地と建物をただ同然で譲られることになったためである。

H Gの母親は「あれは幽霊屋敷だから、貰わなくていい」と半狂乱になって止めたが、H Gにとっては、祖父母との思い出の家であり、また近所に友人も居たので、貰う事にした。

●再会 R R

叔母から譲り受けた“ミルクホール白山亭”の建物と附随する建物と土地…

H Gは独り、ミルクホール白山亭の入り口を眺めていた。

「あれ？H Gじゃん」

H Gは声の主を見ると、ひとりの男がH Gを指さしていた。

「俺だ、R Rだよ！」

このR Rと言うのは、この街でR 交易商公社と言うC 国物産ならびにその周辺国の物産を扱う輸入商の社長の息子である…H Gの記憶では…。

H Gの両親は帝都内の家に住んでいるが、H G自身は幼い頃から、よく父親に連れられて、ミルクホール白山亭裏にある祖父母の住む住居を訪れている。また幼い頃に、一時期母親が長期入院中に預けられた事がある。その時に白山亭の女給目当てに遊びに来ている年の近いR Rと仲良くなり、一緒に遊んでいた。R Rの曾祖父母とH Gの曾祖母は仲が良かったと祖母から聞いていたので、親子代々の付き合いになる。

「お前、R Rか！久しぶりだなー」

「ホントだな。元気か？」

「うん、おかげさまで」

とたわいのない挨拶をすると、

「どうしたH G？店の前でボー然として…」

と訊ねるR Rに対して、H Gはポツリと、

「実は…この店と土地貰った…」

と答えた。それを聞いて、普段糸目のR Rは目を見開いて、H Gの肩を叩き、

「そうかい、良かったなあーって、ナンで？ここには、お前の叔母さんが住んでいるだろ？」

と最初はトーンが高く喜んでくれたが、ふと思い出した様にH Gに訊ねた。

「ここ、有名な事故物件だから、叔母さんが更地にする事が出来なかったのと、叔母さん長期入院する事になって、管理する事ができなくなったんで、ただ同然で貰った…」

とH Gが平然として答えると、

「へえースゲー棚ぼた」

とR Rは驚いた。

「でも、事故物件なんだよなあ…」

と再びミルクホール白山亭の建物を見上げて言ったH Gに

「有名な霊媒師、知ってるけど」

「暫く住んでみて、どうしようもなくなったら、お願いするよ」

「そうか、ここに住むのか…じゃ前の様に行き来できるな」

とR Rの言葉にH GはR Rに向き直り、

「お互いオッサンだけどね」

とふざけて言うと、R Rもそれに応じて、

「いーじゃねーか、また盤ゲーム（この世界の囲碁や将棋の事）とかしようぜ」

「…そうだな」

H Gは改めてR Rを見ると、R Rの隣に女性と小さな子供の姿を認めた。

「R R、隣の人は奥さんと子供？」

「そうだよ」

と言つて、隣の女性に

「こいつは、幼馴染のH G。このミルクホール白山亭のオーナーH Mさんの孫」

「初めまして、H Gと言います。R Rとは子供の頃、よく遊んでいた中です」

「初めまして、R Rの妻Lです。この子は末娘のSです」

と言つて、R LはH Gに頭を下げた。まだ幼いR Sは母親の陰に隠れる様にH Gを見つめていた。

「初めまして…H Gです。よろしくお願いします」

とH Gが挨拶を返すと、R Lは自分の後ろに隠れようとするR Sの手を引いて前に出し、

「これ…S、おじさんにご挨拶なさい」

「…Sです」

「おいくつ？」

「5さい…」

とR Sが答えた。H GはR Rの方を向いて、

「末娘ってことは？」

「はは、5人子供がいる」

とR Rは笑つて言った。

「そうだ、ウチによつてけ…どうせ食事なんぞ満足につくれないだろ？久しぶりにお袋（Rの母親）の手料理食つていけ！」

「あなた、それは言い考えね。おいでなさいH Gさん」

R Rとの会話で、H GとR Rの仲を知ったR Lは氣さくに応じた。

「では、お言葉に甘えて…」

● R Rの家で

H GはR 交易商公社の奥にあるR Rの家でR Rと昔の思い出話から、最近まで軍に居た事を話していた。

「なに？お前、今まで兵役に就いていたの？」

と驚くR Rに

「うん…約18年…」

「なんで、そんなに？」

「いや、任務が面白くてさ…気づいたら軍縮でリストラ…」

「なに…そんなにドンパチとか人殺しが面白かったのかよ！見損なったな！！」

R Rが呆れて（R Rの祖先はC 国人です。R Rは在皇C 国人。H Gが居た皇国政府陸軍の主な敵はN 国とC 国の反政府組織）言うと、

「…いや、確かにドンパチはやった事あるけど、俺の任務は新兵器の機器類のテスト部隊だよ…兵役の殆どは実験施設でのテスト」

H Gは困り顔で話した。

「…？と言う事は、戦場に居るより機械いじりしていたと言う事か…」

「そう」

「なにも…そんなに、政府の兵隊として軍に居る事無いじゃん」

「ほら…俺、軍オタクだから、新兵器開発に貢献なんて、いい響きじゃん」

「あー…そうか！それで納得した」

R Rは納得して、テーブルを叩いた。

「はい、H Gさん食べて、食べて…」

R Rの母親がH Gに次々と料理を勧める。

「ありがとうございます。おばさん」

「それにしても、急よねえ…あなたの叔母さん、入院するなんて…それも長期入院なんてねえ…それもやっぱり…あの土地のせいかしら？」

「…母は、私にこの土地…特に母屋は幽霊屋敷だからダメだと半狂乱で止められましたけど…兄弟夫婦は私に早く出て行つて欲しいようなので、受け継ぐことにしました」

「あら、そうなの」

R Rの母親が驚いて言った。

「ま、H Gがあそこに住むのなら、事故物件の幽霊達も落ち着くんじゃないのか？」

R Rが方眉を上げて言うと、

「そーだといけどね」

とH Gも応じた。

R Rとの話に区切りがついたところで、R Rの祖母が

「I M…いや、H Mの御孫さん」

「はい」

「食事が済んだら後で、私の部屋においで」

「はい」

R Rの祖母はまだ存命で、子供の頃、H Gの祖母H Mに勉強を教わったりしていたそうだ。

「H G…あんた、よくこの街に帰ってきましたね」

「おばあさんも元気そうで」

「いや…ワタシももう年だよ…近い内あんたの御祖母さんの所に行くよ」

「おばあちゃん…また…」

R Lが心配顔で言う。

「まあ、いい…久しぶりにH Gあんたの占いをしてあげよう」

「おばあさんの占いは驚くほど当たりますからね」

「…だろ？キシシ」

夕食後、R Rの祖母はH Gを占う。

「あんたはこれから先、苦勞をする…そうさね、後10ゝ20年かかるかね…でも安心おし、その間にあんたは大事な種を植え、育てる事をする。苦勞の年が明ければ植えた種は一氣に花が咲いて実を結ぶ。その実達と今まで植えて育てた種で既に実をつけたモノ達が集まりお前さんを盛り立ててくれる。更にそれに惹かれたモノ達も遠くから集まって一層盛り立ててくれる…今しばらくは辛抱して、種を植えて育てることをおし…白山亭は今しばらく再開出来ないね…でも、苦勞の年が明ければ、ワタシの若い頃以上に白山亭は賑わい繁盛する…ワタシはそれが見られないのが残念…」

「種を植えて育てる…」

とH Gが言葉を繰り返すと、

「そうだ…それを忘れない事」

とR Rの祖母はH Gを指して言った。

「はい」

●白山亭母屋とボイラー

夜になって、H GはR Rの家を辞して改めて母屋に入る。叔母から貰った鍵を使い白山亭店舗横の木戸の鍵を開け、店舗脇の通り道を抜けると、そこに二棟の建物がある。一棟は“母屋”と呼ばれ、ミルクホール白山亭ならびに娼館碇屋の経営者一家とそこに務める女給

または女給兼娼婦達が住んでいた。もう一棟は『男屋』と呼ばれ、ミルクホール白山亭に務める男達が住んでいた。

母屋には24時間入れる大風呂があり、そのお湯は男屋にあるボイラーから供給されていた。

H Gは母屋の鍵を開けて、玄関に入り、叔母に言う様にいわれた「ただいま!…おばあちゃん」と一言いった。

母屋の鍵を開けた時に、H Gの周りにヒンヤリして湿気の高い重い空気がまとわりついたが、H Gの一言でそれらが霧散し、母屋の中も少し明るくなった気がした。

「(…これが事故物件の要因の一つ…)」

とH Gは直感したが、今の一言で、H Gはここに歓迎されたようだ。

つい先日まで叔母が住んでいたので、家電・食器等の日常生活用品はそのまま残されていた。叔母から許可を得ているので、それらを使用して、取り敢えずお湯を沸かした。

遺影の飾ってある部屋に行き曾祖母と祖父母の遺影を前にして、

「今日からここに住むことになりましたH Gです。よろしく願います」

と言って、頭を下げた。

H Gは風呂に入ろうかと思ったが、叔母の話では母屋の風呂は男屋にあるボイラーを動かさないとお湯が出ないらしい…叔母もボイラーの動かし方を知らないので、祖父が亡くなって以降、動かすどころか点検すらしていないとの事だ。

男屋には都市ガスを使った風呂があるとの話を聞いたが、この日は面倒になったので、そのまま布団を出して寝てしまった、

●H Gの曾祖母の子孫達

H Gは朝からR Rに呼び出された。R 交易商公社の事務所に行き、

「こんにちは」

「H Gさんいらっしゃい」

R Lが出迎えた。

「奥さん、R Rは？」

「まだ、港の倉庫から戻らないの。呼びつけてごめんなさいね。そこに座っていて、いまお茶を出します」

とR Lが奥に引っ込むと、

「ただいま…おう、H G、来てたか…じゃすぐ行こう」

とR RがH Gを急き立てる。それを見てR Lが慌てて

「あなた…まだお茶が！」

「戻ってきたら、飲むよ」

R RはH Gを連れて商店街の一本裏通りにある『葛葉組』と大看板のある立派な門を潜る。玄関でそこに居る人に

「組長さんいますか？H Gを連れてきたと伝えてください」

「親父さんはお待ちかねです。どうぞお上がり下さい」

屋敷の奥に通されると、応接セットに座っている年上の如何にも…と言った風貌の漢に

R Rは

「組長さん、H Gを連れてきました」

「おう、H Gよく来た」

「? ? ?」

「俺は、この葛葉組7代目のD Aだ…お前の御婆さんの異父兄の長男の孫にあたる」

H Gは存命中の祖父母と父親から、白山亭のある街界限は曾祖母の子孫達が暮らしていると聞いており、現に駅前の飲食店の店主達とは親戚であることを知っていて、葛葉組の組長もその一人であるとは聞いてはいた…しかし、H G自身は葛葉組の組長とは面識がなかった…なので、初めて顔を合わせ「7代目…ずいぶん続いているな」とH Gは驚いた。

「お前の叔母のH Sはどうも我々の言う事を聞かん…駄目だと言っても、何度もあの土地を更地にして売ろうとした…その度に何事かが起こる。そのためあの土地は事故物件になり、とうとうH S自身も結婚すらできずに、挙句には、病気で長期入院する羽目になった。次のあの土地と建物の持ち主はH Gお前になったが、H G、お前が白山亭に住むのなら、ぐにでも白山亭を再開してくれ！」

とD Aにいきなり言われ、

「それが…」

H Gが言葉を濁すと、

「何だ？」

とD Aが語気を荒げた、そこにR Rが取り成すように、

「いや…組長…実は俺の婆さんの占いでは…」

と言って、R Rは祖母のH Gに対する占いの結果を話した。

「…そうかい…あの婆さんの占いは的中率高いからな…そうか…あと10〜20年は駄目か！」

とあっさり、D Aは認めた。

「H G…」

「はい」

「あの建物（白山亭）と土地は絶対手放すなよ！…それが我ら一族の願いだ…」

「はい」

H GとR RはD Aの案内で商店街に居る親戚（曾祖母が同じ）の家々に挨拶回りをした。

H Gが街内を挨拶回りして気づいたことがある。H Gの曾祖母が3度結婚した相手の子孫達は、

D 姓…葛葉組は例外として、不動産業、飲食店、食料品店、医薬品店、衣料品店等の商人関係が多い

J 姓…県領地議会議員を始め、医療関係、警察、消防、港湾局、市役所等の役人関係が多い

I 姓…工務店、町工場、散髪、電気店、被服・履物等の職人関係が多い

I 姓の末娘の孫であるH Gは「俺の手先が器用なのは、祖父の血と祖母の血からなんだ…」と思った。

そして、最後に曾祖母の実家に案内された。

「わたしは、A Aです。あなたの曾祖母の実家にあたる『A味噌醤油店』の社長です。あなたの祖父のH Hさんは、よく当店に来ていましたよ」

「祖父は何をしに？」

「主に、私の父と盤ゲーム（この世界の囲碁や将棋の事）をよく指していました…あと、当店のボイラーの整備とか調整の手伝いとかですね…ここのボイラーと白山亭のボイラーは同じ型のものですので」

「そうだったんですね」

一通りの挨拶回りが終わり、葛葉組の屋敷内でH GとR RはD Aからお茶を勧められた。「そういえば、H Gお前仕事は何をしているんだ？」

「先日まで軍に居ました…もともとリストラによる強制除隊になりましたが…」

「じゃ、今は？」

「無職です…これから再就職先を探します」

「嫁は？」

「今まで兵役に就いていましたので、居ません」

「ウチの娘はどうだ？まだ30代だぞ」

「HG、やめとけ…あの娘は勝気が強い！尻に敷かれるぞ」

とRRがHGに耳打ちした。

「RR！聞こえてるぞ、いらん入れ知恵をするな！」

とDAに恫喝されたRRは恐縮した。

HGは白山亭に帰ると男屋に入り、ボイラーを見上げて「俺の爺さんが扱っていたボイラーの姉妹がいたのか…」と感慨深げに思ったが、今白山亭に住んでいるのはHG一人なので、ボイラーを何とかして動かして風呂や暖房に使おうとは思わず、いずれ人が増えたら、A味噌醤油店の社長から誰かボイラーを使える人を紹介して貰うか、友人のSKがボイラー技士の免許を持っているので、お願いしようと考えた。

その翌日、DAに連れられて、役所や不動産店、電力・ガス会社・水道・電話各社に対して名義変更手続きに費やされた。

●再就職

HGの再就職は苦労の連続であった。軍縮のため、軍が兵士のリストラをすると同時に今まで好調な業績を続けていた軍需関係企業もまたリストラを始めた。巷にはそれらリストラされた人々が巷に溢れ、今まで好調であった皇国全体の景気が一気に冷え込んだ。

H Gは当初、今まで民間兵器産業に居た経験で、出向していた企業を始めとする競合企業に就職活動をしていたが、それらの企業自体がリストラを行っていて、H Gが入り込める余地がなかった。毎日のように、市の職業安定所でその手の求人情報を検索しながら、なかなかいい条件の求人情報が見つからず、「(R Rのおばあさんが言った占いの結果がもう現れてきたか...)」と情報端末の前で項垂れてしまった。

軍をリストラされた際に紹介された就職斡旋業者も軍からお金を貰っているの、H Gに就職先を斡旋してきたが、H Gの意向を無視した仕事ばかり紹介してきてどれもH Gに向くような仕事ではなかった。

H Gはそれらに見切りをつけて、職業安定所通いや、人材バンクに登録して職を探す日々が続いた。

その間、H Gは除隊した旨をS Kに連絡して、S Kが既に町工場で働きながら、片手間の仕事にしているガンスミスの手伝いを始めた。でも、H Gにとっては、趣味のレベルであり、これだけで食べていけないと感じた。

S Kと話をして、ガンスミスの工場を男屋で行う事にして、男屋の1階の入り口付近の部屋の畳を剥がして、板を敷き詰め、そこに除隊時の割り増し給付金を頭金にして借金で購入した旋盤やボール盤等の工作機械類を置いた。

その際に、S Kに男屋のボイラーを見て貰ったが、「スゲー、オンボロ…操作マニュアルがないと俺の手に負えん！」と匙を投げられた。

S KとH Gの顧客がそれまでY市銃砲試験場、港町シューティングセンターだったのを、H Gの親戚筋の伝手で港町警察署、港町水上警察署、Y市役所鳥獣駆除係と猟友会にまで広げることが出来たが、定期的に仕事があり安定している割には儲けが薄く、それで二人で十分に食べていくにはまだ稼ぎが足りなかった。

そんなある日、H Gの元にあるD Mが届く。

人材バンクに登録してから色々な企業、商店から『面談しませんか？』とのD Mが数多く届いていたが、内容を見て断ったり、面談に行って、話をするとH Gの意向とは違う職種だったり…なかなかいい職が見つからなかった…ただ、このD Mに書いてある求人票の内容を見て「(あつ…これだ!)」と思った。

H Gは早速求人票の連絡先に電話して先方の人事の人と面談の約束を取り付けた。

履歴書と職務経歴書を急いで手書きで作成(この当時はP Cで作成するのは無礼であると言われた時代)し、履歴書用に写真館で撮影した写真を貼り付け(この時代、街角の証明写真ボックスがなかった)。それらをD Mの封筒と共にクリアファイルに入れて面談に望んだ。

面接当日、H Gは道に迷い約束の時間に遅れてしまった。民兵会社の受付でその旨伝えて謝ると、「よく道を間違われる方が多いので、ご安心ください」と言われた。

面接には民兵会社の社長ではなく、取締役と相談役と呼ばれる人が出てきた。今まで面接に行った民間企業では大抵人事部長止まり…二次面接で重役クラスであったが、いきなり重役と面接する事になったので、H Gは緊張した。

H Gが軍役時代に所属していた機甲師団の特殊車両試験部隊について相談役が何故か良く知っていて、H Gの上官についての世間話も交えて話が進んだ。

…その結果、採用…

H Gの長い軍歴と実験部隊での数々の特殊技能と、多岐に渡る資格…特に特別銃器携帯・使用許可証の限定解除が決め手になった。後にこれらが日和見保身内密主義の上層部(サイコパスの精神異常者達)達にとってH Gが邪魔な存在にされるとは思ってもみなかった。

●HG教官

HGの民兵会社での仕事は新兵として入社する社員達教育・訓練の教官である。

昨年で今まで150年以上続いていた徴兵制度が無くなり、民兵会社に就職する人は、今まで兵役で教育・訓練を受けてきた者だけではなく、高校・大学・専門学校を卒業したての何も知らない新卒者の若者を社員として雇用して、兵士としての教育・訓練をする必要が生じた…これはどの民兵会社にも共通する課題で、如何に効率的且つ早期に兵士として役に立つ人材を育て上げるか、それが民兵会社の生き残り競争の一つになった。

徴兵制度があった時代から民兵会社は存在していた。その任務は主に後方支援で、補給物資の調達から輸送、時には最前線での車両や兵器類の整備、捕虜などの監視等、中には傭兵業務を請け負っている会社もある。軍縮により、皇国政府軍は縮小したが、俄然C国反政府組織との戦闘は、あちらこちらの皇国領地内で続いており、皇国政府軍だけでは戦力が足りず、民兵会社の役割が増え、最前線で皇国軍の部隊と連携して作戦任務を請け負うまでになった。そのため、皇国政府軍はその名称を皇国正規軍（通称…正規軍）と改称するまでになった。そのため、皇国政府軍は縮小した。

民兵会社の問題はそれだけではなく、軍縮により巷にあふれた元軍人が興し、新規参入した民兵会社が当時数多く設立され、激しい人材獲得と経営競争が始まっていた。

HGが中途採用された民兵会社DKは、古くからある民兵会社の一つであり、組織・機材はある程度充実しているのは幸いであった。

HGの民兵会社の所属は事務部門の総務部人事課の中に新設された教導隊。所属はそう決まったが、上司は総務部の部課長を通り越して取締役直轄の部門で、他に顧問と相談役が実質上の上司…後に社長直属の部門に昇格した。

H Gに早速新兵の教育・訓練のプログラム作成の重責がのしかかる。機甲師団の特殊車両試験部隊にいた頃も、新兵教育に携わっていたとはいえ、その時の新兵は基礎訓練を既に終了した者達であり、まったくの素人ではなかった。

そこで、H Gは自分が新兵時代受けた一年間の基礎訓練の中で、民兵会社の業務で要不要の教育・訓練を節にかけ、3か月で一様民兵会社の社員として使える教育・訓練プログラムを作成し、顧問と相談役に説明し、ブラッシュアップを図った。

問題は、教育を実施する場所は、民兵会社の会議場などを使用して行えるが、訓練のための施設がこの会社にはなかった：今まで軍務経験者が入社するので、全く素人達を鍛えるための野外・屋内の練兵場や射撃訓練の為の射撃場すらない始末…

幸い、取締役の話では近くの軍設備や民間射撃場を普段の隊員訓練に使用しているとの事で、それを踏襲する事にした。

それらをまとめた新兵教育・訓練プログラムと実施予算見積をまとめた書類を社長室で、社長ならびに、取締役・顧問・相談役を交えて説明し、実施の承認を得ることができた。

● I FとH G

新兵教育・訓練プログラムについて、社長に説明した時に、社長からK府領地の支部にI Fと言う副支部長が居るので、このプログラムを見せて意見を聞くようにと言われた。

社長に伺うと、I Fと言う人物も隊員の教育に関心のある人物だと言う事である。

H Gは自席に戻るとP Cのメールで挨拶分を送り、社長からの指示で自分の作成した新入社員教育・訓練プログラムについて意見を求められた旨を、新入社員教育・訓練プログラムのファイルと共にI Fに送付した。

I Fからの返信コメントにいくつか修正箇所を指摘されたものの、全体は好評価であったので、上司の取締役を通じて社長に報告すると、「来年の新入社員の入社式を行うので、

そのスケジュールを組む様に…その際に皇国各地の支部長を呼ぶ事。ついでにK府領地のI Fも呼ぶように…」とH Gに指示があつた。

その翌年の新入社員の入社式にI FはK府領地の副支部長ではあつたが、当時体調を悪くしていた支部長の代理として挨拶をした。H Gは初めてI F本人を見た。「女の人だったんだ…」と初めて知った。

その後の懇親会でH Gと教育談議で盛り上がり、その後も意見交換するようになった。体調が悪化したK府領地の支部長が退任する事になり、I Fが支部長を継ぐことになった。その為の研修に本部に一時期来ていた。

その時に、I Fは自信の研修の合間に、H Gの行う新入社員の教育・訓練に顔を出し、H Gから会話や指導のネタを振られる等、この頃から後の「H GとI Fの夫婦漫才」と言われるやり取りの原型ができていた。また、夜はH Gと新入社員達とちよくちよく夜の酒場に飲みに行っていた。I Fは酒豪でH Gとよく徹夜で飲んでH Gが先に酔って介抱されていた。

I Fは喉の疾患があつたので、煙草の煙等はダメで、以前H Gと飲んでいた頃、H Gがパイプを取り出したときに、I Fがこの事を打ち明けたので、その時は「F子ちゃんの前ではタバコを吸わない！」と誓ったものの、数日後の飲み場で誓いを忘れてすっかりI Fの前でパイプを吸って、嫌われた。

I Fが本部での研修が終了し、正式にK府領地の支部長に昇格してK府領地に戻っても、メールや電話などでの意見交換は続いた。

I FがK府領地支部長時代は「准尉の尉官待遇」として、社内でも高待遇になった。しかし、I Fに悲劇が襲った。K府領地支部で正規陸軍との共同作戦でI Fが指揮する戦闘で自軍に大きな損害を出し、その責任を取らされる形で支部の閉鎖と支部長を解任され

た。更に生き残った部下と共に本部の部隊に併合された。

本部に異動してきた当時は、I Fはかなり荒れていて、H Gは慰め役に徹していた。

I Fが本部に異動して生きたので、I Fの新たな部隊編成の為に社員教育にH G達教導隊も参加させられて、荒れたI Fとそれを煽ったり宥めたりするH Gとの間で、H GがI Fを過剰に煽ってI Fが怒って拳銃を抜いてH Gに突き付けるやり取りが「夫婦漫才」の完成系として社員達に知れ渡った。

● K TとI T

民兵会社には、I FやH G等の正規軍のリストラ組から再就職する者もいれば、仕事内容や給与U Pを目的に民兵会社を渡り歩いている者がいる。

K T（後のT T）やI Tはその代表：

K Tは、H Gが教導隊に配属され、新兵の教育・訓練のプログラム作成の承認が社長から降りた直後に、教導隊のアシスタントについてH Gが顧問に話をしている時に、彼女が転職してきた。

その経歴は、正規陸軍を任期満了で除隊して、以後他の民兵会社に居て、そこからH Gの居た民兵会社に転職してきた。そのため、戦闘経験があるが、戦術・戦略能力が低かったので、H Gが教育した。

K Tの入社当日、顧問から「お前の花嫁候補が入社してきた」とからかわれ、H GはK Tを意識するようになった。

時々、K Tと二人で話す時に、H Gと目が合うと「ん？」と言って、小首を傾げるかわいらしさがあった。

K TはH Gが入社した隊員の教育・訓練を行う教導隊の現場で、H Gのアシスタントをしてくれた。また夜H Gが教導隊で教えている社員との懇親で夜の酒場に行く時も同行して

くれた。

H GもK Tも互いを意識していたが、H GとK Tの年齢の差（7歳）とK Tの二人の姉の夫の年齢より上になるので、結婚までには踏み込めなかった…それでも、良い関係が続けて、K Tは入社8年で結婚退職をした。

結婚後、出産したT T（K T）は子供を連れて民兵会社D Kを訪れ、H Gの前で「ほーら、パパよー」と言う冗談を言つて、顧問に呆れられていた。

I Tは兵役義務の期間を更に4年延ばし任期満了後、他の民兵会社に居て、そこからの転職をしてきた。戦闘能力は高いが、やはりK T同様戦術面の知識に乏しかったので、H Gが教育した。I TはK T入社の翌々年に入社しているので、二人はH Gの部下として新入社員達を教えていた。

体術に優れていたので、隊員の体術の訓練を行っていた。そのため、ついた渾名が「H Gの代貸」…そのために、日和見保身内密主義の上層部に目を付けられ、社内評価が不当に悪く扱われたので、8年程で退職してしまった。

●H YとY O

H Yは皇国の徴兵制度が無くなって初めての年に民兵会社D Kに入社した新入社員である。

その時のH Y他38名の新入社員に対する入社式が民兵会社D K創立以来、初めて行われた。今まで中途採用者が多く、新卒採用者はなかったのと、まとまった数の新入社員を受け入れたのは初めてなので、色々手違いとか生じたが、一応恙無く入社式を終えることができた。

その中でH Yは異色且つ不思議な存在だった。

当時、徴兵制度が無くなったので、民兵会社に入社する人は、高校卒業や専門学校卒業者。大卒も文系大学の出身者が圧倒的なのに対し、理系大学出身者が入社して来るのは少なくなっていた：当時、理系大学出身者は年収が下がるが、民兵会社と比較すれば、当然安全なため、企業に入社する傾向が高かった。H Gも理系大学出身であるが、当時は徴兵制度があったので、比較にすらならない。

通信工学科を先行したH Yは、小柄で童顔な為、女子高生に間違われる。H GもH Yを見て「よく小さい体で体力勝負の民兵会社に入社するな…」と驚いたが、H Yの持ち前の頑固さと小さい体に見合わない体力で、訓練を耐え抜いた。

ただ、そのひたむきな態度の陰に、H Gは、なんか影というか：暗い過去があるとは思ひ、当時訓練を手伝ってくれていたK Tとその事について話して、気にかけていた。

低い背のためか、上目使いで見上げるその姿は猫を連想した。本人曰く、背が低く実は近眼で普段はコンタクト：たまに眼鏡をかける。またこの外見とは裏腹にかなりの酒豪：酒に対してはI Fと互角に張り合えた。

任務がない時は、H Gの後ろについて回っていて、翌々年から、K TやI Tと共にH Gが社員に対して行う教育・訓練のアシスタントをした。

ある日、H Y達新入社員の隊員達と飲んでいて、H Gが新入社員達の日常の生活に対してあれこれ意見を言うので、一人の隊員が「まるで、おとうさんみたい…」と言った。

後で思えば、これが「H Gの親父」の始まりであった。

H Yはその持ち前の頑なさで体力が相まって、部隊長まで進級した。しかし、他の部隊長達は軍時代の実戦経験が豊富にあったが、実戦経験が少ないH Yをいきなり部隊長に据え

たのは、人材不足とは言え、無謀だとH Gは感じた。

その懸念は、直ぐに表れてしまった。

それは、H Yが部隊長としての初めての任務。正規陸軍に交じって自国の離島を占領したC国の反政府組織の残党(※)狩りのために離島に逆上陸を試みるも反撃にあい、正規陸軍もろともH Yの小隊は壊滅に近い状況になった。H Yはパニックに陥り、指揮が満足に取れない状況：H Yの部下でH Yと同期のK Kが、別の離島で海兵隊との合同作戦に単独で駆り出されているH Gに連絡した。

※C国との和平を結んだとはいえ、C国では先の大戦で一度は戦勝した反政府軍閥が政権を握ったが、その後の選挙に破れて敗退し野党になったとはいえ、已然軍組織を地方に持つっており、それが度々海を超えて島嶼国家である帝国領土を侵略していた：国連の条約による軍縮で正規軍が縮小したとはいえ、小競り合いはちよくちよく起こっていた：そのため不足しがちな兵力を補うため、民兵会社が皇国内では盛んになった。

H Gはこの作戦当初から教え子のH Y達を気にかけていて、「何かあったら躊躇わずに俺に連絡しろ！」と行って、H Yの作戦指揮を取っている正規陸軍の指揮官とコミュニケーションを密に取っていた。

K Kから渡された通信機のレシーバーに、H Yが現在の状況と悲鳴に近い泣き言を言ったのを聞いてH Gは「しちめんどくせー、そこを動くなH Y！」とレシーバーに怒鳴ると、自分の作戦している島で海兵隊を出し抜いて他社の民兵会社の人たちをまとめて、一気に島を制圧し、返す刀で島にあった大砲を使ってH Yの居る島に向けて長距離射撃を敢行した。そして、一時的に撤退の猶予を与え、そこから揚陸艇に乗り込み、H Yの居る離島の海岸に迎えに行った。

後にこの事についてH Yに問いただされると、

「通信機の電波からH Y達の位置を割り出して、そこを当てないようにして撃った」

と答えたが、実は、その時に入手した敵の通信機の周波数帯をメモして、こちら側から敵無線機の電波を傍受し、発信源を割り出して遠方から榴弾を打ち込んだ。

H Gだからこそできたことであるが、それと同時に一步誤れば非常に危険な橋を渡ることになる。

結果、H Yは部隊に死傷者を多数出し、その責任を問われて自主退職せざるを得なかった。

H Gは退職の挨拶に来たH Yに「お前の行動は、正規陸軍の命令に忠実に従ったので、罪に問われるいわれはない。逆に俺の方が命令違反で罪に問われるのが当然…この作戦、計画当初は俺達が囷で、お前達は楽に島を取り返すはずだった。それが、敵がそちら（H Yの上陸した島）を重要拠点として防御戦から攻めに兵力を振り向けたのであって、これは、正規軍（陸軍と海兵隊）の作戦ミスだ！俺は、以前からお前らを率いた正規陸軍の指揮官と無線で話をしていたが、敵兵力のバランスが変わったのはこちら（皇国の軍）の誰も気づいていなかった。自分を攻めるな…俺か？俺はいつもの上層部から目をつけられているので…えっ勲章の件？知ってる。先程の指揮官から聞いている。話を上に持っていたのは、当の本人だから…それがチャラになったのは、あいっら（民兵会社の日和見保身内密主義の上層部）の常套手段だからね…じゃ、元気だな！」

と、寂しそうにH GはH Yを励ました。

Y Oは、芸術学校の出で、H Y同様異色の存在であった。ただ不思議な事に軍に必要な基礎体力と知識は、入社時に既に備えていて、即戦力の人材であった。そのため、H GはY Oを新入社員の部隊長に任命して、教育・訓練を行った。

Y Oが人に対しての接し方、教え方も既にできていて、H Gが不思議に思ってた話をしたら、

私学の防衛予備校出身で更に教員の免許を持っているとの事…HGは「(なんで、こんな軍人として有能なのが、民兵会社に入社したんだ?)」と疑問に思った。

HGは、YOを部下にと望んだが、天敵であるSSの下に配属された。が、SSと合わずにすぐに退職した。HGは「(勿体ないことを…)」と思った。

●TYとAM

HY達からおおよそ10年後、この頃のHGは、新入社員教育・訓練プログラムが確立していて、HGは後進の育成を始めた。

また、世間はHGの様にリストラされた元軍人が興した民兵会社がどんどん増えてきて、その民兵会社は何を主に仕事を請け負っているか、また給与は、入社したらどの様な教育・訓練が受けられるかで新卒者が応募してくる状況になった。

なので、HGは入社後の新卒者達は何を求め、また何をしたいのかを面談して、基礎訓練後の個別訓練メニューを組み立てる必要に迫られた。

TYは、実家は代々軍人家系の固い家庭の長女で、本人は工学部を修了し、大学院に進もうとしたが、親に諦めるように言われ、また、就職も地方銀行に決まったら、親から軍か民兵会社じゃなければ駄目だと言われたので、民兵会社に就職したそうである。その就職に対しても、入社前に色々な民兵会社を親が比較検討し、他の民兵会社では、娘の評価が低く扱われると判断して、HGの居る民兵会社に入社してきた。

TY本人は、元々の基礎能力が高く、同期の新入社員より抜きんでていた。

また、実家がそうであるので、TYは皇国から佩刀が許されている。と言う話を聞いて、HGが驚いた。

教育の場では常に教官(KTやIT、先輩のHYとか…HGはこの頃、後ろで見ていた)

の質問に的確に答えを出し、また教官に逆質問して困らせる場面もあった。

また、訓練では、はすばしっこい動作で相手を翻弄したりするので、HGは「猿みtainなやつぢやな…」と思った。

AMは、TYの2年後輩にあたる。彼も身体能力と知識は有能であったが、独断先行のきらいがあり、よく失敗していた。

そのため、HGによくいじられていた。

HGはAMの事を「(よく懐くから、犬みたいな奴)」と思って可愛がっていた。

でも、入社後3年で退職。後にAMの同僚達からは「ヤバい事やって海外逃亡したそうです」と聞いた。

この頃のHGの渾名は「オヤジ」…AMと絡んでいた時に、普段は「教官」と言った居たのに、ふとHGに対して言った事から発覚した。

●HM

HGが白山亭母屋で一人暮らしをしている間に、母屋に居候が来た。

HMはHGの兄の娘である。看護師学校を無事卒業して、勤務先が港町総合病院に決まったので、勤め先に近いと言う事でHGの義姉がHGの家に居候させた。

HGも、正規陸軍を除隊後、暫く帝都の兄夫婦の家に居候していたので、2つ返事で受け入れた。

それからしばらくして、母屋の2階の部屋はHMの同僚の看護師達の仮眠場所やたまり場になった…

● I YとI A

H Gが定年間近になると、体力的な問題で、自ら先頭に立って訓練を行う事はあまりせず、部下に任せることが多くなる。

その中でも、銃器の取扱いについては、“特別銃器携帯・使用許可証”の限定解除があるので、他の部下には教える事ができなかった。また、火薬類の扱いも“危険物取扱者”の資格を持つ人が少なかったので、H Gが教えていた。

I Yは、民兵会社に入社当時から、H Yとまた違う雰囲気を持っていた。

後に同僚のI Aや先輩のT Yに言わせると、「暗い性格だった」と言うが、H Gの印象では、確かに暗い表情で周りの同期達と積極的に交流しようとしなが、教育・訓練は自ら進んで積極的に受けていた：後に思うと、彼女は死ぬために最前線部隊への配属を希望するために、教育・訓練は真面目に受けていたのである。そのため、最初は何をやらせても駄目だったが、みるみる能力を向上させていった。格闘術も学生時代にやっていたらしく、体術の教官を負かす事があった。射撃の成績も教育・訓練期間が終わる頃には、同期の誰より優れた成績を残した。

H Gは、I Yの教育をしていたころ、彼女が手を左耳に当てている仕草：さりげなく左手で左耳付近の髪の毛を掻き揚げている様なしぐさだが、重要な話をするときに必ずするの、不審に思い、彼女が廊下を歩いているときに彼女の左側によけて、わざと小声で卑猥な言葉をかけた。その時のI Yの反応が全くなかったことに確信を持ち、後日廊下を歩いているI Yを手招きして呼んで、ラウンジで雑談がてら「お前、左耳が聞こえ辛いんじゃないの？」とズバリ聞いた。

それを聞いたI Y、顔を曇らし、

「なっ：なんでわかったのですか？」

「ああ、営業のS女史がお前と似た仕草をするから…あの人、過去に前線ですぐ近くに爆風を浴びて鼓膜をやられてから、聞こえづらくなっているのね…それで営業に回された」

「…そうですか…」

「よく、この会社に入社できたな」

とHGが呆れて言うと、

「正規軍は、入隊前に兵役検査があつて、聴覚試験で私は落とされるでしょう…ここ（民兵会社）は、入社前の健康診断は自己申告ですし、もつとも入社後の健康診断でバレましたが…社長の計らいで、入社できました」

HGは最近の政府が民間企業に対して身体障害者の一定数雇用を強要しているの思い出した。企業人員の一定割合の障害者を雇用すれば、罰金は払わなくて済む。HGはそれらの書類を作成して政府機関に申請しているので、制度を理解していた。しかし、HGの作成したリストにはIYの名前がないことも知っている。何かある…とHGは思ったが、ハタと政府は近く制度の改正をして、先程の一定割合の人数を上回った場合、補助金を出す予定出ることも思い出した。HGは「そっちな！」と思った。

「このことは、社長から口外しないよう言われています。だから教官、黙っていてくれますか？」

「…分かった」

多分、IYの難聴の件は社長の他あの日和見保身内密主義の上層部も知っている事であろう…知っていて敢えてHGに知らせないのだろう…そんなIYとのやり取りをHGは記憶していた。

IYが左利きなのも、耳の難聴に何か影響しているのかもしれない…また細面の顔とつり目がちなので、HGはIYに狐を連想した。

そのため、IYは教育後、HGの天敵とも言える指揮官SSの部隊に配属される。

I Aは、その同期中でもあまり目立った能力がなかったような…

ただ、訓練中に色々やらかすドジっ子で、それは教育・訓練期間が終わるまで完全に治らなかった。H GはI Aの事をI Yと比較して「狸みたいな娘（ゴメンねーI A。作者）」と思った。

後に碓屋に入り、ガンスミスとエージェントとしての能力が開花し、また任務でも、思いもよらない発想をして周囲を驚かす等…遅咲きの大器の片鱗は、この時点では全然なかった。

後にH Yが「H Gの長女」と呼ばれ、I Yが「H Gの末娘」と呼ばれる（その差約20年）。

● Y M（T M）

Y Mは、正規軍での兵役を経て地元（S県領地）の民兵会社に中途入社後、結婚退職するが、H Gの居た民兵会社D Kに再就職してきて、丁度空席になっていたF県領地の支部長に抜擢された。

その時は、Y MはH Gが居る会社とは知らずに入社し、入隊時の本部での入社説明で退職間際のH Gと再開した。

H Gは本部で入社時の説明の中で、支部長に対する教育を行う時間。最初、お互い「なんかどこかで見たとのあるような…（40年ぶりです。作者）」と言う雰囲気。H Gは話を始めたが、H GがF県領地の責任者の話をしている時に、H Gが学生時代F県領地に居た事を話して、Y Mが「どちらに居ましたか？」との話をきっかけに、大学の後輩のT Mと言う事が判明する。

ただ、H Gがこの後、定年退職したので、民兵会社時代のH Gとは接触がない。

●定年退職

H Gの民兵会社D Kでの主な任務は、隊員達の教育・訓練を行う教導隊の教官であるが、時には前線に出て正規陸軍と共に作戦に従事する事があった。でも、H Gに対して分隊を編成して固定の部下を預けると、何されるか分からないと日和見保身内密主義の上層部（サイコパスの精神異常者達）の陰謀で、H Gの指揮下には分隊ではなく、2，3人の部下をその時の都合で付けられるか、まれに新入社員と入社2～3年の隊員数10名とか付けられた事もあるが、H G単独で任務に当たる事が多かった。

そのため、H Gは正規軍に対しては、“尉官待遇”の准尉と言う破格の待遇で業務契約する事が認められた。そもそも、民兵会社では、階級概念はなく、H Gの“准尉”は、正規軍と行動する際に名乗る便宜上の階級である。H Gの正規軍除隊時の階級は“上級曹長（本来士官学校に行かなければ、尉官に昇格できない。従ってH Gは下士官で最高位である上級曹長）”である。ただ、H Gは単独で正規軍と作戦行動をしたり、帝都にある軍令部や参謀本部をはじめ、官公庁に出入りする機会が多いので、便宜上“准尉”と名乗ることを民兵会社が許可している。それがH Gの民兵会社内の通り名にもなっている。（民兵会社は、正規軍の指揮下で行動するので、正規軍側の指揮は中尉、少尉が執るため、指揮系統の混乱を避けるために、民兵会社側の実行部隊のリーダーは、特異な場合（H Gとか）を除いて尉官クラス待遇にはならない。作者注）

●エピソード

H Gは20年余りを民兵会社D Kに在籍した。定年の60歳を迎えるに当たり、社長から定年延長制度を利用して残るように求められたが、日和見保身内密主義の上層部（サイコパ

スの精神異常者達」の所業に嫌気が指して、社長の求めを辞退して、退職する事にした。

日和見保身内密主義の上層部（サイコパスの精神異常者達）達は諸手を上げてH Gの退職を歓迎した。

退職したH G：退職後も日和見保身内密主義の上層部達の陰謀でかなり少額であるが、退職金を貰ったので、頭にきて学生時代に居たF県領地に旅行に出かける事にした。

母屋の食堂で夕食時に、H Gは姪のH Mに

「おう、H M：ちょっと旅行に行ってくる」

「おじさん、どこに？」

「うん、学生時代に居たF県領地に行ってくるよ」

「どのくらい？」

「そうだな、1週間程」

「そう、じゃお土産楽しみにしてるね」

「分った」

「私は、明日早出だから、おじさんを見送れないわね。気をつけてね」

「おう」

「巻き込まれ親父の番外編「親父と呼ばれた男」 Ⅱ完Ⅱ」